



北米ホーリネス教団
オレンジ郡
キリスト教会
「週報」

2014年の努力目標

1. 朝の15分の祈りを大切に。
2. 1日2章の聖書日課に励む
3. 日ごとの写教に励む
4. 定期の祈り会に参加
4. 聖書研究・家庭集会への参加
5. 礼拝欠席の時は牧師に連絡を。

◎集会案内◎

日曜 礼拝 : 9:30~10:45am
 コーヒー・アワー : 日曜日 10:45~11:15am
 聖書の学び : 日曜日 11:15~12pm
 みふみ会 : 水曜日 10am
 定例祈禱会 : 水曜日 7:30pm
 早天祈禱会 : 土曜日 7am
 家庭集会 : 各地区に2箇所
 牧 師 : 杉村 幸 (日語部)
 : 益田デーロ (英語部)
 電 話 : (714) 827-6244 (教会)
 : (714) 527-1456 (牧師館)
 E-Mail : sugimura1950@gmail.com
 教会ホームページ : www.occc.org
 教会所在地 : 4872 Bishop St.
 Cypress, CA 90630

石 叫 口

◎石叫■

「医療の心、福祉の心」

今年七月の日本ホーリネス教団機関紙『リバイバル』に、「私のおすすすめ、この一冊」というコーナーがあり、そこで新谷道子師の紹介で、工藤信夫先生の『医療の心、福祉の心』という本が紹介されていた。左記にご紹介しよう。

「著者は、『病氣つて何なのでしょううか』と問うています。『多くの医者は病氣は悪、それを治すのが医者の仕事という落とし穴に陥っている。しかし現実には治らない病氣の方が多い。治るかどうかは私たちの想定外にあるのかもしれない。できることは、その人をそつと見守ることなのかもしれない』。そのような心の持ち方が診療室にゆとりや緩やかさをもたらしてくれると書かれています。過度の使命感が相手にプレッシャーをかける。それは不登校問題においてもそうですし、牧会においてもいえることなのかもしれません。深刻な病氣は日常生活を破綻させ、病者を孤独に追いやりまします。その孤独に対してどのように寄り添い、どのような言葉をかけたらいいのでしょうか。著者は一つの事例を挙げています。ホスピスに入院した女性がもうすでに長くないことを知り、『先生、長い間ずいぶんお世話になりました。でもつらくてつらくて』と言われました。まだ若かった医師は、『Aさん、だめじゃないですか。そんな弱音をはいて。元氣を出さなくちゃ』。女性は何も言えなくなりました。後日、女性の氣持ちを聞く機会があったそうです。女性は弱音を吐きたいと思って話したのに、やるせない氣持ちばかりが残ったとのこと。医師の言葉は一見励まし型ですが、自分が対応できない死への恐れや不安などの話題に、本能的に遮断したい氣持ちがあったからだと分析しています。自分自身を顧みても、深刻な会話にとまどい逃げてしまいう自分がいます。心のまん中で、『あなたの思い、言葉を確かに受けとめました』という真剣な姿勢が大切であることを教えられました」

良きサマリヤ人の話がある。強盗に遭つて半殺しになっている人に対し、「彼を見て氣の毒に思い、近寄つてきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した」(ルカ十・33~34)という内容である。見ず知らずの倒れている人を自分のことのように痛み、心を配る姿勢が時代を越えて人々を感動させてきたのである。工藤先生のコメントも、まさにこの隣人愛に倣つたものである。とかく講壇から伝道の使命感のみを語りがちなの自分の牧会姿勢に対して、もっと緩やかなゆとりある対応の大切さを知らされ、心なしか肩の荷が軽くなったようで嬉しかった。

「オレンジ郡キリスト教会の歩み」

オレンジ郡キリスト教会は1977年に発足し、東洋宣教会・北米ホーリネス教団に所属するプロテスタント教会の一つです。北米ホーリネス教団は1921年に創立され、現在は日英両語合わせますと2000名を越える会員になります。

私たちの教会は18世紀に、英国で始まったジョンウエスレーによるメソジスト教会の流れを汲みます。そして他のプロテスタント教会同様、3世紀以来告白され続けてきた使徒信条を、私達の信仰告白と致します。

